

World Watching 30

ワールド・ウォッチング

アムステルダム港 —水際での生活空間づくり—



宮地 豊

財団法人港湾空間高度化環境研究センター
情報研究部長



運河のポートハウス

「ポートルネッサンス21」プロジェクトを中心として、日本においても「ウォーターフロント再開発」は数多く実現してきた。そのキーワードの一つは「生活空間」の再現あるいは創出であったが、日本の事例の多くは商業、スポーツ、文化、観光など人々を呼び込むため開発を「ウォーターフロント」の特徴を生かしつつ行なわれてきた。

一方、海外の港湾では、コンテナ船の大型化等で物流機能が果たせなくなった内港地区が中心市街地に近接している立地条件に目をつけ、さらに、欧米人の特徴ともいえる、「人々の水際へのこだわり」を生かすために「ウォーターフロント」の特徴を生かした居住空間の開発が行われている事例がある。

以下では、オランダのアムステルダムの「The new Eastern Docklands（新東ドックランド地区）」のプロジェクトを中心に紹介する。



運河の水上生活の家 —ポートハウス—

アムステルダムはアムステル川をダムでせき止めて造られたことからアムステルダムと名付けられたといわれるように、水と戦い、また、約160の運河によって水を生かして発展してきた。現在、運河は重要な観光ルートであると共に水上生活用の「ポートハウス」が並んでいる。この様子からも、決して便利とは思われない水上での生活へのこだわりが感じられる。

The new Eastern Docklands プロジェクトの背景

アムステルダムは、17世紀に設立され繁栄した世界初の株式会社である東インド会社によって世界の港と貿易を行ってきた。その後、1874年から1927年に、現在のアムステルダム中央駅東側（Eastern Docklands地区）に埠頭が建設され、アムステルダム港の中心として大きな役割を果たしてきた（下図参照）。しかし、1970年代になって西側の外港への展開が進むにつれてEastern Docklands地区の物流機能上の役割が落ち込んでしまった。この地区の再開発が本プロジェクトのねらいである。



The new Eastern Docklandsプロジェクト地区

対象地区は突堤あるいは埠頭ごとに地区が名付けられている。(Java, KNSM, Sporeburg, Borneo, Oostelijke Handelskade, Rietlandenの各地区)。



The new Eastern Docklands プロジェクトの特徴

①混合した居住空間としての開発

アムステルダムでは、1965年頃から郊外への住民移転が増加し、中心市街地には高齢者や移民の比率が高まってきたことなどから、アムステルダム市として魅力ある住宅の整備が課題となっていた。そのため、Eastern Docklands地区は、クルーズターミナル以外を居住空間として整備することとされた。また、低所得者向けの公共住宅を一定割合 (Java地区では25%など) 整備し、バランスのとれた住民構成とすると共に、賃貸、分譲住宅の割合も定めた上で混合した居住空間とすることとされた。

②水際へのこだわり

開発に際しては、岸壁形状は変えず、埋め立ては行わないこととされた。さらに、Java地区では埠頭を横断する4つの運河が掘り込まれ、各家から水辺が見えるようにされている。

また、Borneo地区では、ボートハウスのように直接水面に接しており、ボートを係留したり、ベランダから釣りをするなど、家から直接水際を楽しめる設計とされている。

③「ランドスケープと建築のガイドライン」と その範囲での自由な住宅設計

戸建て住宅の開発に際しては「地区の全体の景観」、「自然条件 (風向きなど)」等を考慮したランドスケープのガイドラインがランドスケープデザイナーにより設定され、さらに各地区ごとに建築デザイン上のガイドラインが設定される。その範囲内で自由な建築設計がされている。そのため、各家は非常にユニークだが、開発地域全体の高低等のバランス、建物の幅・高さ等の制限、庭の配置などによって一定の調和が保たれている。



おわりに

ウォーターフロントに居住空間を中心とした生活空間を実現する方法は、これからも引き続き勉強すべき課題と思われます。今回紹介したアムステルダムの事例では、特に、①居住者や



ジャワ地区の人工運河と住宅



ボルネオ地区の水際住宅



ユニークだが幅・高さ等の調和した住宅

その形態が混合した空間、②水際に対するこだわり、③ランドスケープ・建築デザイン、が大きな特徴となっています。皆様の参考になれば幸いです。